

富士山の気象

富士山の気象

富士山の標高は3,776mで、日本で最も高い山です。このため、富士山は平地とは全く異なる気象をしています。ちなみに2番目に高い南アルプスの北岳(3,193m)とは500m以上も標高差があります。

〈山岳の気温〉

年間平均気温は-6.2°C、8月の平均気温は6.2°Cです。この6.2°Cは東京の真冬の気温とほぼ同じです。このため、山頂では8月でも雪が降ることがあります。ちなみに8月の月平均気温は東京が27.4°C、甲府が26.6°C、瀧の河口湖でも22.1°Cです(1981~2010年)。これらと比較しても山頂はかなり寒いことがわかります。しかも山頂では強風が吹いていることが多いため、体感温度はもっと下がります。

〈山頂の風〉

山頂では年間を通して西よりの風が強く吹き、最大風速10.0m/s以上の年平均日数は313日、30.0m/s以上となる日は11日もあります。風速30.0m/s以上は「立っていることができず、屋根が飛ばされたり、木造住宅の全壊が始まると風速です」。

年平均風速は11.4m/s、「風に向かって歩きにくく、傘がさせない」風速ですので、これもかなりの強風であることがわかると思います。一番穏やかな8月でも平均風速は7.3m/sもあります(ちなみに山頂での最大瞬間風速は1966年9月26日観測した台風26号、91.5m/sです)。

2003年の甲府の最大風速は15m/sですが、富士山山頂では8月だけで15m/sをこえる日が11日もありました。※富士山頂の風速の観測は2004年以降行われていない。

雲の形と天気

富士山の上空や周辺では多種の特徴的な雲が発生し、これらの雲は富士山を飾り、すばらしい姿を我々に見せてくれます。

これは、気流が単独峰である富士山に当たることにより、山頂を乗り越える気流と山腹を回り込む気流が発生し、複雑な流れを起こすためです。

富士山の代表的な雲として、笠雲や吊雲があります。

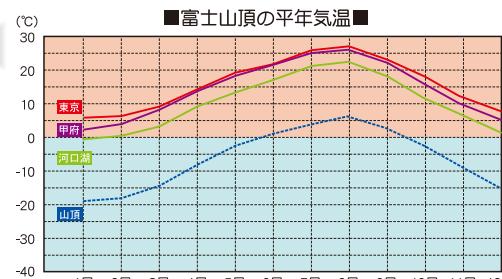
笠雲(かさぐも)
富士山の山頂に発生する雲で、笠や帽子のような形をしています。

富士山の山腹に当たった風が山頂を乗り越えるような上昇気流となり、風上で次々と雲になります。風下では次々と雲が消えるため、雲は山頂にとどまって見えます。

吊雲(つるしまぐも)
富士山から離れた風下に発生するレンズ状の雲で、橋円や翼などの形をしています。これは富士山に強い風が当たることにより風下で発生する乱気流や上昇気流などが原因で、笠雲と同じようにとどまって見えます。

富士山クイズ

- Q1:富士山の山頂から昇る日の出を何という?
 ①ピックパン富士 ②ダイヤモンド富士 ③後光富士
(答えは6ページ)



〈富士山の天気〉

一般的に「山の天気は変わりやすい」と言われており、これは富士山も例外ではありません。突風が吹いたり急に雨が降り出すことがあります。また、富士山では山腹に雲が位置することもあるので、「麓は晴れても登っている途中で雲の中に入り雨になり、山頂は雲の上に出て再び晴れる」ということもあります。

〈山頂の気圧〉

山頂は日本一高い場所=日本一気圧が低い場所でもあります。気圧は640hPa程度(平地の約2/3)で空気は薄く、かるく駆け足をした程度でもすぐ息が上がってしまいます。実際、登山された方の多くが重度から軽度の差はある、高山病にかかります。高山病を予防するためには水分をとり、体を冷やさず、体を高所に慣らしながらゆっくり登ることが大切です(高山病にかかってしまったら休憩を取り、回復しないようでしたら無理をせず下山するようにしましょう)。



雲の形と天気予報

笠雲や吊雲の形とその変化により富士山の天気の変化を予測することができます。

これまでに多くの方々により調査が行われていますが、だいたい笠雲が発生した場合は70%、吊雲が発生した場合は80%の確率で当日または翌日に雨が降っています。

富士山の地形・地質(1)

火山としての富士山

富士山は日本列島のほぼ中央に位置し、山梨県と静岡県にまたがっています。その高さは海拔3,776mで日本一高く、その面積は、890～940km²(富士山の噴出物が堆積している範囲)で、その体積は、400～500km³とされています。このように富士山は日本で最も大きい玄武岩成層火山で、しかも活火山です。

日本列島は陸側のユーラシアプレート、北アメリカプレートと海側から両プレートに沈み込む太平洋プレート、フィリピン海プレートという4つのプレートが交わっています。富士山はフィリピン海プレートが日本列島に沈み込む、衝突境界付近に位置しています。そして富士山は、伊豆・小笠原弧の最北端に位置し、同弧が東北日本弧・西南日本弧の島弧に会合しているといい、複雑な地質構造をした場所で成長しました(右上図)。

富士山は山頂から噴き出した溶岩と火碎物(かさいぶつ)が交互に積み重なって、現在の形になりましたが、富士山の噴火は山頂のみで起こったわけではありません。富士山の山腹でも多数の噴火活動がありました。このような噴火で形成された火口を側火口と呼びます。主に富士山の北西から南東にかけての一帯に多く存在し、その数は大小あわせる100以上にもあります。大室山や長尾山、宝永火口がそれにあたります(右下図)。

富士山は緩やかな斜面と四方に広がる広大なすそ野を持つ左右対称の美しい円錐形をしており、秀麗な山容を誇っていますが、実は少しづつ崩れているのを知っていますか? 富士山にはいくつかの沢がありますが、これらの沢から岩石が崩れ落ちています。有名な沢としては山頂から北東にのびる「吉田大沢」と真西にのびる「大沢崩れ」がありますが、特に「大沢崩れ」では浸食が激しく、平成24年から25年にかけて、約12万m³(10 t 積みダンプ24000台分)もの土砂が流出しています。

